

すくすく

GENKI

2018年5月

京都協立病院

小児医療課



ワクチンで防ごう!

おたふくかぜと

おたふくかぜ難聴



おたふくかぜワクチンが未だに定期接種ではない日本では、ほぼ4年おきにおたふくかぜが流行します。おたふくかぜワクチンが未接種のかたはワクチンを受けておきましょう。

## おたふくかぜ何が怖いのか？

おたふくかぜ（英語名：ムンプス）流行時に小児科医が心配し恐れているのは、腫れ上がったまんまるの顔ではありません。お熱でもありません。実は一番恐れていることは、目に見える症状が落ちついてから現れることが多いです。

おたふくかぜに罹ったあとの後遺症で、何より怖いのは、**難聴**です。

一般にムンプス難聴と呼ばれます。聴神経自体がダメージを負ってしまうことにより、高度な難聴と成ります。補聴器の効果は期待できません。片方の耳だけに難聴が生じることが多いですが、両耳に高度難聴症状が出ることもまれにあります。

発症頻度は200人に1人とか500人に1とか多少のばらつきはあるものの、かなりの頻度でおきていることは確かです。罹りやすい年齢は4～5歳の幼児です。

保護者からすると「何も症状がないし、こども本人にも聞こえが悪いという自覚がない」のに、突然「一側性高度感音性難聴」と診断され、かつ治らないことを告げられ、絶望の淵に立たされる…



こどもが難聴と診断された後になって始めて、医師から、ムンプス難聴はワクチンで予防できる唯一の難聴疾患であったことを教えられる。多くの親は、こどものワクチンを受けさせてあげられなかった後悔と自責の念で苦しむ…

\*これが、おたふくかぜという病気・おたふくかぜ難聴の実態です。

難聴を発症する子を一人でも減らすために、現在、当小児科では、おたふくかぜワクチン接種の呼びかけを、幼児から小学生をお持ちのご家庭に対し、重点的に行っています。

おたふくかぜワクチン接種を急ぎましょう。  
こどもを守るために。  
親として後悔しないために。



## 医療懇談会を開催します!!

日時：5月22日（火）13：30～

テーマ：「食物アレルギー：玉本晃医師」

「離乳期の補完食：表美智代管理栄養士」

たくさんのご参加お待ちしております。

前は2018年3月27日に

「子どもの湿疹・軟膏の使い方：アトピー性皮膚炎って？」というテーマで開催しました。玉本医師よりアトピー性皮膚炎についてや軟膏の種類や使い方などのお話を聞いていただきました。

おかあさん方からも

「ステロイド剤の使用方法がわかりよかった」

「いろんな種類の薬があり塗り方が難しくて悩んでいたのが良かった」

「他の薬についても色々教えていただき不安が解消されました」 などの感想を頂きました。

9名の方に参加していただきました。ありがとうございました。



“医療懇談会で取り上げてほしいテーマはありませんか？”

お母さん方が4～5人集まっていたいただければ自宅や地域でも開催可能です。

お気軽に声をかけてください